

神戸市立高等学校の将来を考える

平成 6 年 4 月

神戸市教育懇話会

平成6年4月

神戸市教育委員会
教育長 小野 雄示 様

神戸市教育懇話会
座長 平原 春好

神戸市立高等学校の将来を考える

本懇話会では、平成4月6月25日以来、「神戸市立高等学校の将来を考える」について、慎重に多面的な懇談を重ねてまいりましたが、懇談内容について次のようにとりまとめましたので、報告いたします。

目 次

はじめに	1
市立高等学校の現状と課題	3
1 市立高等学校の果たしてきた役割	3
2 市立高等学校の現状と課題	5
3 市立高等学校への期待	7
市立高等学校の改善の視点	11
1 個性尊重、人間性重視の教育	11
2 21世紀に生きる教育	13
3 生涯学習社会に生きる自己教育力の育成	15
4 地域に開かれた「市民のための市民の高校」	17
改善の具体的方策	19
1 市立高等学校の創造的変革	19
2 具体的な市立高等学校像	20
3 教育環境の改善	26
4 転科・転学、学校間連携	27
入学者選抜制度、学区制	29
1 入学者選抜制度	
2 通学区域	
活力ある教員集団、大学との連携	31
1 活力ある教員集団への期待	
2 教育効果を高めるための大学との連携	
おわりに	33

《付属資料》

- 1 神戸市立高等学校について
- 2 政令指定都市における市立高等学校
- 3 神戸市立中学校卒業生の推計
- 4 平成4・5年度神戸市教育懇話会活動の記録
- 5 平成4・5年度神戸市教育懇話会委員名簿

はじめに

本懇話会は、平成4年度から、「市立高等学校の将来を考える」というテーマについて、神戸市立高等学校のこれまでの歩みや、社会の動向、市民のニーズなどを踏まえながら、教育諸機能全般にわたり抜本的な検討を行い、市立高等学校の望ましい在り方について懇談を重ねてきた（付属資料4）。平成5年9月には、それまでの懇談の中から、市立高等学校の現状と課題、市立高等学校の改善の視点について中間報告書を提出し、その後は改善を具体的に実施するための方策、その他の課題について綿密に検討を重ねてきた。本報告書は、中間報告書の内容（本報告書の、 ）と、その後検討された内容（本報告書の、 ）とから成る最終的なまとめである。

本懇話会は、歴史と伝統を誇り、神戸市の発展とともに歩んできた市立高等学校を、より望ましい形において新たに想像していくという基本的立場に立っている。市立高等学校は都市が設置する学校として、都道府県立学校にない利点を持っている。市は都道府県よりも規模が小さく、市民に対してより密接な対応ができるとともに、21世紀においては、都市が教育に果たす役割はきわめて重要になると予想され、市立高等学校に対する期待もそれだけ高くなるであろう。本懇話会は、生徒減少期に向かう現在を、市立高等学校の質的充実をめざす好機として活用したいと考えた。

市立高等学校の改善の方向を考えるにあたっては、現在までの教育の成果と反省の上に立ち、その在り方を考えるとともに、高等学校卒業後、若者たちが社会で自立し、積極的に働き生きるための基礎をつくる教育の在り方を考えることが必要である。そこで、本懇話会は改善の基本的視点として、「個人尊重、人間性重視の教育」「21世紀に生きる教育」「生涯学習社会に生きる自己教育力の育成」「地域に開かれた『市民のための市民の高校』」という4つの視点を設定した。これらの視点は、言い換えれば、これまでの教える立場に立った教育から、学ぶ立場に立った教育に重点を移すということであり、また、これまでの学校教育中心の教育から歩を踏みだし、社会とともに歩む教育を目指すことである。このような改善の基本的視点を踏まえて、改善方策を話し合うとき、現行制度の抜本的な改善を考えることが必要であり、そのためには多くの資源を投入する必要があることが、本懇話会の共通認識になった。

本報告書の構成は、はじめに神戸市立高等学校が果たしてきた役割とその存在意識を確認し、市立高等学校の現状と課題を明らかにした。次いで、本懇話会が実施したアンケー

ト調査の結果や市立高等学校教員で構成する「新しい高校教育の在り方の研究」専門部会との意見交換に基づき、市立高等学校に対する期待について述べ、市立高等学校の改善の視点と改善の具体的方策その他を提案した。

いうまでもなく、高校教育の改善という課題は、ひとり神戸市立高等学校にのみ現れているものではなく、全国的に最も大きな教育問題の一つとなっており、改革案や改革方策がそこここで提示されている。本懇話会は、そのような改革案や改革方策を視野に入れながら、国際都市、教育都市として大きく飛躍して行く神戸市の将来像を踏まえて、魅力ある市立高等学校をつくるにはどうすればよいかについて懇談を重ねてきたのであり、本報告書はそのために活用されることを願うものである。

市立高等学校の現状と課題

1 市立高等学校の果たしてきた役割

(1) 伝統ある中等教育機関としての役割

神戸市立高等学校は現在、12校設置されており、全日制については普通科が4校、普通科と商業科の併置校が1校、商業科が2校、工業科が2校で計9校、定時制については普通科が2校、工業科が2校（ただし、1校は全定併置校）である。

市立高等学校の前身が創立された時期は、ほとんどが戦前である。最も古い歴史を誇るのが、現神港高等学校の前身である私立神港商業学校であり、明治40年4月1日に創立され、同43年4月には市立神港商業学校となった。次いで、明治45年4月15日、現赤塚山高等学校の前身である神戸市立高等女学校が創立されている。他の高等学校の前身は、概ね大正期から昭和10年代にかけて創立されている。このように市立高等学校は、その前身にまで溯ると、長い歴史と伝統を誇り、戦後は新制高等学校として、市民の教育に、また、地域社会の発展に貢献してきたことは論をまたない。ただ創立時の校名と現在の校名がすべて異なっていることに現れているように、各学校の歴史は単一の学校の発展史ではなくて、合併や廃止を繰り返した分離独立の歴史である。しかし、それはまた、時代の変化や市民の要請に応じた教育機会を提供しようとした、神戸市の苦心の選択の歴史であったともいえる。

(2) 女子教育と職業教育の振興

戦前における神戸市立中等学校の際立った特徴は、女子教育と実業教育（戦後は、職業教育と改称）の振興である。赤塚山高等学校、須磨高等学校、楠高等学校の前身はいずれも女子教育の教育機関である。女子教育の内容は技芸・裁縫・家政等の実科、あるいは商業など実業教育を中心とするものが多かった。また、女子教育に劣らず神戸市が力を入れてきたのが実業教育である。市立実業学校の創設は、上で述べたように、明治43年の神港商業学校に始まるが、その後、大正から昭和にかけて、男子ならびに女子の商業学校を、また、昭和10年代には工業学校を続けて設置し、実業教育の振興を図った。これに対して男子の普通教育機関としては、昭和14年4月1日に市立神戸中学校（現葺合高等学校）が創立されている。

実業教育振興の伝統は、その後も継承され、現在、市立高等学校には同じ市内の県立高等学校に比べ職業高校が多く、また職業学科を持つ普通高校もある。（全日制市立高等学校＝普通科4校、普通科と職業科の併置校1校、職業科4校。全日制県立高等学校＝普通科18校、職業科2校）。このように、女子教育と実業教育に重きをおいた戦前の市立中等学校は、県下での中等教育の補完的役割も果たしたといわれるが、その役割は今でも受け継がれている。

（３）広く、多様な生徒のニーズに応じる教育機会の提供

高校進学率が95%を越え、多様な能力・適性、興味・関心を持った生徒が多数入学してくる現在の高等学校において、学習や学校生活に不適應を示す生徒が全国的にも増加しており、そのことが今日の全国的な高校教育改革を促す要因になっている。神戸市立高等学校においてもそのような高校教育の変化と無縁ではなく、相次ぐ高等学校の新設に伴い、いわゆる「輪切り」によって、実際の学力と教科内容の要求水準との間の落差の大きい生徒が多数入学してくるようになり、学習指導、生徒指導上の問題がしだいに大きくなってきた。

このような問題に対応するため、現在、市立高等学校の普通科においては習熟度別授業、類型・選択の工夫などを行い、また、職業科においてはコース制などの設置により、生徒の多様な能力・適性、興味・関心、進路等に対応して学習意欲を喚起する指導体制をしいている。また、葺合高等学校には英語科、神港高等学校には情報処理科、神戸工業高等学校にはインテリア科など特色ある学科が同じような趣旨で設けられ、大きな成果をあげている。

定時制高等学校は、かつての勤労青少年が学ぶ場から全日制高等学校の補完的な役割も担うようになっているが、多数の不本意入学者に新たな学習の場を確保し、学習意欲を喚起するような、さまざまな取り組みが行われている。このように、市立高等学校は、入学してくる生徒の多様なニーズに応じて、きめ細かく指導し、彼らに実質的な教育機会を与えようとさまざまな取り組みを行っており、市立高等学校のこのような努力に対して市民から高い評価を受けている。

（４）地域社会のニーズに応じる教育

現行法制では、高等学校の設置義務は都道府県にあり、市立高等学校の設置は任意であ

るが、市立高等学校を任意に設置することの意義は、市民の意思を尊重する地方自治の原則に見出すことができる。換言すれば、それは、地域社会のニーズに応じた教育の実現を可能にすることである。

地域社会のニーズに応じる教育という面では、市立高等学校および神戸市は相当の実績を持っている。たとえば、上で述べたように、市立高等学校は過去において女子教育と実業教育の振興を通して、地域社会のニーズに応え、新制高等学校になっても実業教育の伝統を背景に、地元の産業界の要請に応じて有為な人材を数多く送り出している。

昭和40年代後半から県立高等学校新設期までは、市立高等学校の人気も高く、地域社会のニーズに十分応えてきた。神戸市内における県立高等学校の数（特に普通科）が市立高等学校の数を上回っている現在、市立高等学校に対する主として大学進学に関する評価は厳しくなっているが、行政区によっては、市立高等学校へ進学を希望する比率が高いところが見られる。これはアンケート調査の結果にも現れている。

また、かつて、高校進学が要求が高まった時に、市民の意向にいち早く対応したのも市立高等学校である。例えば、御影工業高等学校（神戸工業高等学校より分離新設）、摩耶高等学校（定時制から全定併置校）、神戸西高等学校（定時制から全日制に転換）の創立がそれである。

市立高等学校は最も基礎的な行政単位である市の施設であるために、市も市民の要請に素早く、柔軟に対応し得たのである。

2 市立高等学校の現状と課題

市立高等学校の設置数は、人口比で政令指定都市のなかでは神戸市が最も多く、幾多の変遷を経ながらも、概ね順調に推移し、教育都市神戸の発展の一翼を担ってきた。

しかし、高等学校進学率の急上昇、それに伴う多様な能力・適性、興味・関心を持った生徒の入学増加、県立高等学校の新増設、産業構造の変化に伴う高等学校卒業生に対する需要の変化、大学進学者の増加、それに伴う普通科進学希望者の増加、市民の価値観や生活スタイルの変化など市立高等学校を取り巻く環境の変化により、市立高等学校自体もその影響を強く受け、現在に至っている。

（1）入学生徒の状況

公立高等学校の入学者選抜は、本市では一貫して単独選抜制が採用されているが、選抜

方法が昭和43年度から導入された兵庫方式、すなわち中学校で作成される調査書を合否判定の主資料とする方式になってからは、生徒の受験校の決定が主として学習評定（内申点）をもとに行われるようになり、高等学校の序列化が一層進むようになった。そのような中で、幾つかの市立高等学校は次第に低位に位置付けられるようになり、昭和61年度に兵庫方式が解消されたのちも、この傾向は固定化されたままとっている。

その原因の主なものとして、市立高等学校の施設・設備が不十分であること、普通科においては高校序列の主な基準となっている大学の進学実績が十分とはいえないこと、職業科においては全国の状況と同様に普通科志向の高まりの中で職業科への進学希望が減少したこと、知育偏重の教育観の中で学校の特色を確立することができないことなどがあげられる。

アンケート調査の結果によると、市立高等学校への生徒の入学において、現在通学している高等学校像が第1希望でないとは回答した生徒は、学校差はあるものの平均すると全日制普通科で43%、同商業科で45%にのぼっている。また、中学3年の2学期当初の進学希望校調査（平成4年度実施）では、入学希望者が定員に満たない学校もある。

このように市立高等学校の中には、積極的な意志を持たずに入学してくる生徒が多い学校もあるが、入学後において、学校のきめ細かな指導や部活動、あるいは、特に職業科においては資格取得や各種検定試験の合格を目指して学習の励みとするなど、充実した学校生活に満足して卒業していく生徒が多いのも事実である。

（2）教育内容と生徒の進路

市立高等学校の卒業後の進路は、普通科にあつては学校によってかなり異なっているが、大学・短大進学のほか各種・専修学校へ進むものも多く、就職する生徒も20%余りと非常に多様化している。職業科にあつても就職のほか、大学・短大、各種・専修学校へ進む者が10%以上になっている。

このように、生徒の進路が多様化していくことに対応して、普通科では商業科目を選択させたり、商業科目を置いた類型を設けたりしており、一方、職業科では進学類型を設けたり、専門科目を減じて普通科目が選択できるようにするなど、それぞれに教育課程を工夫している。

また、卒業後の進路に加え、生徒の能力・適性、興味・関心は、ますます多様化する傾向にあり、市立高等学校では習熟度に応じた分散授業をはじめ、進路へ向けての補習授業

や資格取得・各種検定試験のための指導、学習の遅れがちな生徒への補充指導等を行っている。

しかし、生徒が自ら選択し、意欲的に学ぶことのできる多様な教育課程が編成されるまでには至っておらず、一人一人の個性を伸ばさせる条件整備が十分であるとは言いがたい。生徒が明確な動機を持って入学を希望し、いきいきと高校生活を送ることのできる魅力ある高校づくりが急がれるところである。

(3) 施設・設備の現状

本懇話会において市立高等学校の施設・設備が不十分であることがしばしば指摘されている。神戸市の教育史によれば市立高等学校の施設・設備はたえず問題にされてきたといわれている。老朽化した校舎等は、毎年かなりの費用をかけて改修し整備しているが、学校数が多いため抜本的な改善には至っていない。十分な校地面積を持ち、施設・設備の整った県立高等学校が相次いで新設されていく中で、市立高等学校の評価が相対的に低下する一因にもなっている。

例えば、現在ある市立高等学校の校地面積をみると、ほとんどが 30,000m² 以下であり、中には 20,000m² 前後の学校もある。新設される多くの高等学校が 40,000m² 以上であることと比較して全ての市立高等学校が狭小であることは、市立高等学校の評価に影響を与えている。

生徒にゆとりある高校生活を送らせ、良い教育効果をもたらすためには施設・設備の整備は不可欠であり、十分な財政措置が望まれる。

3 市立高等学校への期待

(1) 市立高等学校の役割の見直し

神戸市立高等学校は、このような現状のなかでいくつかの課題をもっているとはいうものの、前述のように市立高等学校が果たしてきた役割は大きく、そのことは全体における市立高等学校の存在意義を示すものとなっている。しかしながら、市立高等学校を望ましい方向に改善するにあたって、これまでの役割を、ここでもう一度見直すことも必要である。

例えば、「1(1) 伝統ある中等教育機関としての役割」で述べたように、改廃を繰り返

返すことは望ましいことではないので、市立高等学校の改善を図るに当たっては、中・長期的な展望に立って、一貫性のある理念のもとに高校づくりに努めるべきである。

「１（２）女子教育と職業教育の振興」に関しては、職業教育の伝統は受け継ぎながらも、産業構造が大きく変化し、職業教育の見直しが進んでいる中では、市立高等学校のこれまでの役割も見直してみる必要がある。また、高校教育の在り方として、個性尊重の観点から生徒の大幅な選択を可能とする多様な教育プログラムの提供が求められている現在、普通科か職業科かという固定的な二分肢のみのコース分けについても検討が必要である。

「１（３）広く多様な生徒のニーズに応じる教育機会の提供」については、生徒の多様な教育ニーズへの対応ということ自体は高く評価されるべきであるが、市立高等学校の将来を、事態の成り行きに委ねるのではなく、明確なポリシーをもって改善の方向や方策を定める必要があると考える。本懇話会は、その検討にあたっては、これからの高校教育に求められる在り方を出発点として、それに対して市立高等学校はどのように変わるべきか、その可能性や方向性について検討を重ねている。

「１（４）地域社会のニーズに応じる教育」については、地元の産業界に人材を供給してきた市立高等学校は、今後も継続してその役割を果たすことが期待されるが、さらに一層、一般市民に支えられるように、一般市民のニーズを深い次元でとらえ、それに応えるような市立高等学校の在り方が求められている。そのためには、市立高等学校のこれまでの活動を市民に知ってもらい、アピールすることが必要である。市立高等学校のきめ細かい生徒指導、生徒に合わせた教育実践、市民のためのさまざまな公開講座などの存在は意外に知られていないのではないだろうか。

なお、高等学校は、その役割を高等学校だけで果たすことはできない。高等学校は小学校・中学校とつながり、また高等教育機関と接続し、さらに企業・会社など働く場にも接続しており、神戸市立高等学校の教育は、これらの機関や社会との連携において考えることが必要である。例えば、設置者が同じである利点を生かして、他の教育機関と市立高等学校を有機的に結び付け、高校教育を効果的効率的に運営する可能性、すなわち、同じ市立の小・中・高等学校、さらに大学間の、また、学校教育と社会教育との間を結び付ける教育・学習システムを構築する可能性について検討することが望ましい。なお、市立学校間の縦の連携だけでなく、同じ高等学校の横の連携（学校間連携）を図ることについての検討も望まれる。

同じ市立の高等教育機関との連携を検討することは、大学進学の問題が隘路となってい

る市立高等学校を活性化するうえでも重要なことである。

いまや、生涯学習時代を迎えて、市立高等学校が市民のためのインテリジェント・スクールとして、さまざまな学習の場を提供することが求められ、市立高等学校に対する期待は高まっている。

(2) 市民の期待 - アンケート調査の結果から -

神戸市民は神戸市立高等学校をどのように評価し、期待しているのでしょうか。また、市立高等学校の教員や生徒は、市立高等学校についてどのように考えているだろうか。

本懇話会は、論議を深めるための基礎資料を収集するために、平成5年3月に市立高等学校教員と生徒(1年生)、および神戸市立中学校の生徒(2年生)とその保護者を対象に、市立高等学校の在り方に関する調査を行った。ここでは、そのアンケート調査からいくつかの結果を簡単に紹介する。

まず、市立高等学校と県立高等学校の入学希望では、中学生、保護者とも全体として県立志向はかなり高い(中学生については市立高等学校 26%、県立高等学校 50%、保護者については市立高等学校 20%、県立高等学校 68%)。ただ区域によって市立高等学校志向が高い、もしくは、県立高等学校とほぼ変わらないところもあり、それは、居住区住民のニーズが関連していると推定されている。そうだとすれば、市民のニーズを踏まえた市立高等学校づくりを考えることが必要となる。

子供の大学進学を望んでいる保護者が高等学校に期待しているのは「個性を伸ばす」「幅広い人間関係の形成」「人格の形成」など人格に関わることが高い比率を占めている。すなわち、人間的な形成が高等学校に対する保護者のニーズということになる。この点については教員も同じような回答を寄せている。普通科志望か職業科志望かについては、普通科志望が多い。

市立高等学校に学んでいる生徒は、生徒全体の約 1/3 が現在の学校に満足していない。また、このような状況を反映して教員の最大の悩みは、生徒の教育面のことである。その中でも特に学習意欲の欠如を問題としている。さらに、市立高等学校教員の多くが問題だと思っているのは、「施設・設備にかかわること」(23%)であり、次いで、「学区制・選抜方式の在り方」(23%)、「中学校の進路指導の在り方」(15%)の順である。この結果は、市立高等学校を改善するためには、施設・設備を整備するなど条件整備をすることは無論のこと、学区制・選抜方式など高等学校制度の基本にかかわる面にまで検討を加

えることが必要なことを示している。

また、生徒減少期を迎えて市立高等学校が存続すべきかどうかということについて、教員の回答は、「統合・再編を含めて市立高等学校全体で見直しをする必要がある」(48%)、「小規模化しても現在の高等学校は存続すべきだ」(31%)、「各校で部分的な見直しをする必要がある」(15%)の順である。いずれも存続を希望する意見が圧倒的に多く、そのためには抜本的あるいは部分的改善が必要であると考えている。また、教員、保護者とも新学科の設置、新しいタイプの高等学校には高い関心を示している。

以上のように、アンケート調査の結果からは、市立高等学校は存続すべきであり、そのためには、高等学校制度の基本にまで立ち入って改善が必要であること、また、改善を前提として市民のニーズを踏まえた新しい高校づくりを目指すことが必要という見解が多いといえよう。

市立高等学校の改善の視点

1 個性尊重、人間性重視の教育

(1) 趣旨

神戸市立高等学校を改善するための第一の視点は、個性尊重と人間性重視の教育である。

個性尊重の教育は、生徒の個性を大切にすることだけではなく、生徒のもつ個性を引き出し個性を伸ばす教育であり、そのためには生徒が選択することのできる幅を広くし、また生徒に対する評価の基準を多元化することが必要である。

人間性を重視する教育は、人間らしさを育み、あるいはとりもどす教育であり、そのためには人間としての謙虚さや基本的な行動マナーを身につけ、社会の中でともに生きる論理を行動で示すことのできる人間を育てることが必要である。

個性を尊重し、人間性を重視する教育は、これまでの画一的教育の反省から導き出される視点であるが、そこには、個人または人間としてのプライドや自信をもつ生徒の育成、人間性の回復、教える側の立場から学ぶ側の立場に立つ教育という発想の転換がある。

(2) 目的・方法

個性を尊重し、人間性重視の教育を行うことの目的、ないしは方法として以下のようなものがあげられる。

偏差値偏重の画一的な教育から生徒の能力・適性、関心・意欲に応じた教育の実現
...多様な背景をもっている生徒に、彼らの特性に応じた教育を行い、学習意欲を喚起し、能力を伸ばす。

生徒の目的意識の醸成...生徒の学習目的を明確にして、学習効果を高める。

高等学校間の序列化の是正...多様な評価尺度による選抜方式を導入し、偏差値に基づく高等学校間の序列化を是正する。

中途退学者の防止...学習に興味をもち、学校の生活に適應させることによって中途退学者を防止する。

「差を競う教育」から「ちがいを認める教育」への転換...学力による優劣意識をなくし、多様な人間の価値を認める価値観を醸成する。

教育の効果を高める学校規模の確保...多様なニーズを持つ生徒の選択を可能とする

学校の施設・設備、規模を確保する。

(3) 望ましい高校像 - 改善のための提言 -

個性を尊重し、人間性を尊重する高等学校を目指すためには、上で指摘した点を踏まえて、以下のような内容、形態を備えた高等学校をつくることが望ましい。

生徒の主体的な選択を認める教育プログラム

ア．基礎・基本を身につける教育...生徒の主体的な選択を認めるためには、まず、基礎・基本をしっかり身につけさせることが前提となる。その上で、生徒が主体的に学習を行うことにより、着実に学習を進め、基礎・基本をさらにしっかりと学習することが可能となる。

イ．幅広く選択できる多様な学習内容...生徒が自己の能力・関心等に基づいて教育内容を選択できる多様な学習内容を提供する。

ウ．生徒に柔軟に対応する教育システム...生徒が学習の過程において自己の能力・興味に合った課程に変わりたい場合に、その要求に柔軟に対応できる教育システムを用意する。

エ．学習集団の多様性の確保...多様な特性、価値観を持った学習集団の中で学ぶことにより、生徒は自らの特性を発見し、伸ばすことができるとともに、異質なものに対する寛容の精神を学ぶ。

オ．ゆとりのある生活空間としての施設・設備...生徒の多様な学習、交流、芸術、スポーツ活動等を可能とするゆとりのある施設・設備を確保する。

カ．教育効果を高めるための教員数の確保と資質の向上...生徒の多様な個性、多様なニーズに応じるためには、教員数を確保するとともに、多様な特性・資質をもった教員の育成を図る。

「人間らしさ」「やさしさ」「行動力」を育てる教育

ア．課題学習や体験学習の重視...人間や社会の問題に関して自分でテーマを設定して文献、調査などにより問題を掘り下げ、また、学校外機関でのさまざまな学習体験を行うことにより、社会の仕組みや人間関係について深く学ぶ機会を与える。

イ．異年齢集団による人的交流...少子時代に育ち、同年齢集団との交流経験しかない生徒に異年齢集団との交流を通して、世代の違いによる人間関係を経験させる。

ウ．カウンセリングマインドを持った教職員集団...生徒の悩み、相談を真剣に受けと

め、適切な助言、指導ができる教職員を配置する。

エ．国際社会に生きる人づくり...国際化時代を迎えて他の国の人々と交流し、理解しあえる市民、あるいは将来、国際社会において活躍する人材を育成する。

オ．勤労観や職業観を育成する教育内容...働くことの意味、職業と人間・社会との関係、職業選択と能力・適性とについて学び、生徒の職業選択について考えさせる。

カ．お互いに認めあい、自然を大切にし、社会を発展させる教育

2 21世紀に生きる教育

(1) 趣旨

神戸市立高等学校を改善するための第二の視点は、21世紀に生きる教育の実現である。

後期中等教育機関である高等学校は、時代の変化、地域社会との関係、次の社会の有為な人材の育成を考慮して行われる必要がある。身近かに迫っている21世紀は、社会的にも、経済的にも、文化的にも、学問的にも、著しい進歩や激しい変化が予想され、あるいは人間の生存にとって重要なさまざまな問題がわれわれを待ち受けているであろう。このような社会のなかで、変動に左右されることなく、社会の推移を見据えながら主体的に生きる人間の育成を目指すことが望まれる。

(2) 目的・方法

21世紀に生きる教育は、以下のような目的、ないしは方法で行われる。

21世紀を目指した教育内容の充実...21世紀は科学技術が飛躍的に進展し、国際化、情報化が一層進展する一方、同時に、地球環境の問題、人類の健康・福祉、その他さまざまな問題が出てくるのが予想される。このような21世紀を迎えて、高校教育は新たな時代の変化に対応した教育内容を用意し、変化に柔軟に対応できる人間の育成を目指して行われなければならない。

科学技術の進歩に応じた施設・設備の整備...科学技術の未曾有の発展が予想される21世紀に備えて高校教育は生徒に科学技術の進歩と人類への影響についての基礎的知識を与えるため、また、専門教育においてはそれぞれの分野における教育を科学技術の変化に対応して行えるように、施設・設備を整備する必要がある。

(3) 望ましい高校像 - 改善のための提言 -

21世紀における市立高等学校は、上で指摘したことを踏まえて、以下のような対応を図ることが必要である。

時代を先取りする教育内容...加速度的に変化する21世紀に生きる高等学校であるためには、時代の動向を踏まえ、教育内容を時代の変化に合わせて柔軟に対応することが可能なシステムを持った高等学校であることが望まれる。

市民等の期待を担う教育...21世紀における高等学校は、国民の教育機関として、地域社会における重要な学習の場として市民の期待が高まる。このような市民の期待に応えうるような高等学校の在り方が求められる。

時代に対応する教育...以下の時代に対応する教育についてはその重要性に鑑み、すべての生徒に基礎的教養的知識を与えることが必要であり、また、別に、そのための専門課程・学科を設けることも考えられる。

ア．情報化への対応

(ア) 情報活用能力の育成...情報化時代に生き、情報を創造・活用できるように、生徒の情報活用能力を育成する。

(イ) 高度情報化社会に対する施設・設備...市立高等学校には職業高校を中心として情報教育の施設・設備が設置されているが、高度情報化社会に備えてさらに高度なソフトウェア・ハードウェア両面にわたる整備・充実が必要である。

イ．国際化への対応...神戸市の歴史の中で培われた国際性を生かすような高校教育を図る。

(ア) 海外の教育機関との交流...神戸市はシアトル市、その他海外の諸都市と提携し、教員・生徒の交流を行っているが、この事業を一層促進するとともに、海外の教育機関と提携し、交流を深める。

(イ) アジア諸国の言語・文化の学習...これまでの英語教育に加えて、アジア近隣諸国の言語・文化を学ぶ機会を授業の中に組み込む。

(ウ) 英語教育の充実...国際化時代を迎えてコミュニケーションを容易にするため、使える英語の習得を目指して英語教育を充実させる。

(エ) 日本語・日本文化のコースの設定...国際社会における日本の役割の重要性に鑑み、日本語・日本文化を外国に広めるための基本的な知識・方法について教育し、自国の文化を考える機会を与える。

(オ) 地球市民としての意識の醸成...人間社会の在り方を人類皆同胞であるという観点からグローバルな視点を持った人間を育成する。

ウ．共に生きる社会への対応

(ア) 福祉教育の充実...人間の健康・福祉に関することは、人間存在の最も根幹に触れる問題であり、人間的な思いやりを醸成する場である。このため福祉教育を充実し、その基礎的知識についてはすべての生徒に学ばせるほか、別に福祉教育に関する専門学科の設置も考えられる。

(イ) 高齢化へ対応した教育... 21世紀当初には日本の社会は高齢化社会になる。老いることの意味を考え、高齢者に対する思いやりを醸成し、高齢化社会に自ら対処するために、生徒に高齢化がもたらすさまざまな問題について学ばせる。

エ．環境問題への対応...環境問題に関する関心を高め、進んで環境を大切にすることを育てる。

時代に対応した個性化を目指す市立高等学校... 21世紀の変化に富む時代に対応するためには、高等学校も独自の役割をはたす個性を持った学校であることが求められる。

教職員資質を向上するための研修 - 急速に変化する時代にあっては知識・技術はたちまち古いものとなり、人々の価値観の変化も激しいため、教職員の資質を向上するための研修が、これまでになく重要なものとなる。

3 生涯学習社会に生きる自己教育力の育成

(1) 趣旨

神戸市立高等学校を改善するための第三の視点は、生涯学習社会に生きるための自己教育力を育成することである。

人間の教育と学習が学校教育中心であったこれまでの教育体系に代わって、生涯にわたる学習の意義と必要性が社会的に認められ、生涯学習時代を迎えることになった。生涯学習の観点から重要なことは、自己学習とそれによる自己教育力を育成し、豊かな心やたくましい身体を育むことである。市立高等学校は、このような観点に立ち、生徒のなかに自己教育力を育てるとともに、学校外諸施設と協力して生徒の幅広い発達を図るように努めることが期待される。

(2) 目的・方法

生涯学習社会に生きる自己教育力を育成するには、以下のような目的ないしは方法で行われる。

生涯学習体系と高等学校のあるべき姿...生涯学習体系の中に占める高校教育は、一人の人間として認められる出発の部分に当たる。卒業後、社会人としての生活、学習が容易になるように一般教養、専門的知識・技術をしっかり学ぶように指導しなければならない。それと同時に高等学校は生涯学習の場として市民に学習する場を提供することが求められる。

生涯学習に対応した施設・設備の充実...生涯学習に対応した高等学校を目指すためには、家庭、地域、職場との連携を図り、効率的効果的な施設・設備の充実と利用が求められる。

(3) 望ましい高校像 - 改善のための提言 -

生涯学習社会に生きる自己教育力を育成する高等学校をつくるためには、上で述べた点を踏まえて、以下のような内容と条件を備えたものにする必要がある。

自ら学ぶ喜びを知ることを教えてくれる魅力ある高等学校...高校教育に限らず生徒の学習において最も重要なことは自ら学ぶという姿勢であり、そこに喜びもあり、さらに学習が発展する原点がある。そのためには、高等学校においては生徒の主体的学習を奨励し、効果あるものとするには、以下のような学習環境を醸成することが求められる。

ア．基礎・基本を身につける教育内容...自己教育力を育成するためには、その前提として基礎・基本が身につけていなければならない。したがって、市立高等学校においては、生徒の基礎・基本の習得を最も重視する必要がある。

イ．学びたいことが学べる教育システム...生徒に生涯にわたって学習を継続するための興味・関心、必要性を喚起するためには、生徒が学びたいことが学べる教育システムを用意する必要がある。

ウ．高等学校施設外における体験学習の強化...生涯学習に対する興味・関心を喚起するために高等学校施設外における体験学習を強化する。

学習歴社会に対応できる教育環境...生涯にわたって学習を継続していくことが求められる学習歴社会に対応できるように市立高等学校においても、以下のような教育

環境を整備することが必要である。

ア．図書館の充実...図書館を生涯学習の情報センターとして機能するように整備・充実する。

イ．セミナーハウスの整備...課題学習その他自発的な学習を促進するために、セミナーハウスを整備する。必要に応じて海外に設置することも考えられる。

ウ．カウンセリングルームの整備...生徒の学習の悩みに適切な助言を与える相談機能を持つカウンセリングルームを設置し、その充実を図る。

学習、生活、余暇情報の提供

情報ネットワークの整備...生涯学習に関わる学習、生活、余暇情報を収集し、生徒のニーズに応じて提供する。

4 地域に開かれた「市民のための市民の高校」

(1) 趣旨

神戸市立高等学校を改善するための第四の視点は、地域に開かれた「市民のための市民の高校」の実現である。

市立高等学校は市立の教育機関として地域社会とつながりを持って発展するのが望ましく、それが、市立高等学校を活性化し、改善するための有効な方法である。神戸市は教育都市として、あるいは国際都市として、進取の気性に富む町であり、市立高等学校がそのような恵まれた環境を活用することによって得る教育的社会的効果には、きわめて大きいものがある。市立高等学校は、神戸市の歴史とそのなかで培われてきた文化、芸術などを教育のなかに積極的に位置付けながら、インテリジェント・スクールとして市民に生涯学習の場を与えることなどを通して、市民に支えられ、市民のための高等学校として機能することが望ましい。

(2) 目的・方法

地域に開かれた「市民のための市民の高校」を目指すためには、市立高等学校は以下のような目的あるいは方法をもって整備される必要がある。

市立高等学校のアイデンティティの確立...市立高等学校を独自の理念・校風を持ち、地域社会において認められる存在になるように確立する。

コミュニティの文化の核としての市立高等学校...市立高等学校を地域における文化センターとして機能するように整備・充実する。

学校間連携...生涯学習に関わる多様なニーズに対応するために、学校間、学科間、コース間の連携が不可欠であることに鑑み、学校間連携を促進する。

施設の共通利用...生涯学習の場として学校だけではなく、社会教育その他の施設を共同利用することにより、学習の効率的な促進を図る。

(3) 望ましい高校像 - 改善のための提言 -

市立高等学校が地域に開かれた「市民のための市民の高校」を目指すためには、上で述べた点を踏まえて、以下のような学校として機能するように整備する必要がある。

市民の生涯学習の場としての市立高等学校

教養、芸術、スポーツ等に活用できる総合的な市民施設...学校を生徒のためのものだけでなく、市民のための教養、芸術、スポーツ等に活用できる総合的な市民施設として利用できるように整備する。

教育機能を地域に開放する市立高等学校

ア．リカレント教育...学校と家庭、職場との連携により、学校が生涯学習の場として有効に機能するように整備する。

イ．市民講座の開設...学校が市民のためにさまざまな市民講座を開設する。

市民にサポートされる市立高等学校...市立高等学校が「市民のための市民の高校」であるためには市民にサポートされる高等学校であることが望ましい。そのためには以下のような制度を導入することが考えられる。

ア．市民の参加・提言制度の設置...市立高等学校のあり方に市民の声、要望を反映させるように、学校経営に市民の代表が参加し、提言ができる制度をつくる。

イ．市立高等学校教育振興基金の設立...市立高等学校の振興を図り、市民のサポート体制を強化するために市立高等学校教育振興基金を設立する。

市立高等学校すべての教職員と生徒が市立高等学校の一員であるという一体感を持たせる機能の整備

共通履修カリキュラムの学習...市立高等学校の共通履修カリキュラムとして、地域学（神戸学）の学習、第2外国語としてアジア系の語学の学習等を取り入れる。

改善の具体的方策

1 市立高等学校の創造的変革

時代を先取りし、時代の変化に適切に対応する教育を行い、生徒の主体的な選択を認める教育プログラムを導入し、あるいはまた、自ら学ぶ喜びを知ることを教えてくれる魅力ある市立高等学校をつくるには、現在の教育内容・方法や組織や施設・設備等の一部分を手直しすれば達成されるものでない。それらは、市立高等学校の現状を根本的に再検討し、改めることによって達成される性質のものである。

これは、市立高等学校が、生徒の興味・関心、能力・適性、進路希望等に応え、また神戸市民や地域社会のニーズや期待に応えて、新たな役割を担った市立高等学校群を創造していくことにほかならない。

市立高等学校の創造的変革は、今後継続的に進行していく中学校卒業生（高等学校入学資格者）人口の減少傾向により、現在の12校の再編成を必要とするが、市立高等学校全体の規模は、現在神戸市内の高校教育に果たしている程度（市内公立高等学校全日制課程進学者の25%程度を対象としている。）を下回ることなく、発展的に持続されることを期待する。

このような創造的変革を行うにあたっては、次の三点に留意することが必要である。

（1）市立高等学校の一体化

市立高等学校を、生徒の興味・関心、能力・適性、進路希望等に応え、新たな役割を担う学校に創造することは、各学校を個々に特色をもったものに変革し、一体化して機能させることである。これは、生徒の進路希望への対応や、自校では学習できない教育内容を他校で学習できるなど、学ぶ立場に立った視点で環境を整えることである。

また、市立高等学校を一体的に機能させることによって、すべての教職員と生徒が市立高等学校の一員であるという精神的な繋がりができるなど、教育の相乗的効果が期待される。それは、大きな一つの市立高等学校をつくることとして見ることもできる。

（2）柔構造の市立高等学校の形成

21世紀に生きる生徒のためには、市立高等学校を時代の要請に適切に応え、時代の変

化に迅速に対応でき得る柔構造のシステムとすることが必要である。これは、高校教育における絶えざる内容的検討に的確に対応できるシステムを創出するということでもあり、また、高等学校における基礎・基本と専門教育とのバランスや学習の場と生活の場との組み合わせに意を用いたシステムの追求にいつでも応えることのできる市立高等学校を創造するということでもある。

そのためには、高校教育の総合化を図り、選択制を大幅に導入することが必要である。これは同時に、生徒の個性尊重、人間性重視の教育、自己教育力の育成にもつながる。このような在り方を実現する学校として、総合選択制高等学校を設置することが望ましい。

また、生徒の学習効果や学習意欲を高める観点から、学年制のシステムに単位制の利点を活かすような制度的工夫や、さらには単位制、総合学科そのものの検討も必要であると考える。

さらに、施設・設備においても、多面的な教育目標の達成に対応できるよう、固定的な施設・設備の計画だけでなく、多目的使用を前提としたオープン・スペースを設けるなどの柔構造的設計が望ましい。

(3) 総合学習機関としての市立高等学校

新たな市立高等学校は、地域に開かれた「市民のための市民の高校」になるために、これまでにも増して幅広く多様な生徒を受け入れるとともに、市民にも後期中等教育を保障し、その使命を果たしていく必要がある。

市立高等学校は、生涯にわたって自由に学習の機会を選択し、学び続けるまちを実現するために、市民の生涯学習や市民文化の創造と発信の場となり、リカレント教育による総合学習機関となる必要がある。

そのためには、あらかじめ設計段階から、それらにふさわしい場となるよう配慮することが求められる。

2 具体的な市立高等学校像

(1) パイロット・スクールとしての総合選択制高等学校の創造

これまでの高校教育改善の努力を踏まえつつ、新しい理念と構想のもとで普通科総合選択制高等学校を一校設置し、大胆な高校教育改革に取り組むことが望まれる。この新しい

タイプの高等学校は、21世紀の市立高等学校のパイロット・スクールの役割を担うもので、その成果は既存の普通科高等学校の改善にも生かされることが期待される。総合選択制高等学校が、市民として必要な一般教養を修得するとともに個性を伸長していく教育を実現するためには、つぎの観点が重視されねばならない。

基礎・基本の修得と大幅な選択制の導入

基礎・基本をしっかりと身につけるとともに、生徒の能力・適性、興味・関心、進路希望に応じて幅広く選択できる教育課程の編成が重要である。大幅な選択制は生徒それぞれが自己の学習計画に基づいて時間割を作成し、特定の専門領域を深く学習したり、より広範囲にわたる領域を学習したりできる仕組みである。

3年間を通して、共通必修科目、選択必修科目、自由選択科目の配分と連関には、特別な配慮が必要である。また、現行教育課程の1年次総合と2・3年次分化という枠組みに縛られず、選択制を1年次から導入することを検討することも必要である。

多様に専門的学習を深めることが可能な学系制

生徒が系統的な学習計画を作成し、専門分化した学習をしていくための大枠として、学系制を採用する。この学系は、生徒・市民の要求と地域や産業社会のニーズを踏まえて設定されなければならない。

具体的な学系として、外国語（国際文化）、芸術、体育、人文、理数をはじめ、環境科学、看護・福祉、情報処理、商業などが考えられる。

新しい共通履修科目の創設

現行学習指導要領に示された共通履修科目の他に、次のような科目を学校ないし学系指定の共通履修科目とすることの意義を検討する必要がある。

具体的な科目として、情報教育、環境教育、福祉教育、消費者教育、国際理解教育、産業社会と人間、課題研究、地域学などが考えられる。

生徒の目的意識、進路意識の育成

高校生は、社会的自己を認識し、自己の生き方や将来の職業について様々に考え悩む時期である一方、モラトリアム期として社会的役割が捉えにくい状況におかれているのも事実である。したがって、生徒の目的意識、進路意識を育成していくためには、上記　　の他、様々な機会や場を設定し、多様な人々の生き方・考え方に触れることを通して、自己の将来像を構築していくことを支援する必要がある。とくに、大幅な選択制を実りあるものにするために、進路ガイダンスを充実しなければならない。

生活集団と学習集団の分離と連関

学系選択制は、これまでの授業クラスとホームルームが未分離の学年別コース制と異なって、各科目ごとに学習集団の編成がなされるため、ホームルームをはじめとする生徒の生活集団の編成には、特別な創意工夫が必要である。

学級編成は個性の異なる多様な生徒が集い相互に刺激し合うことが可能なミックス・ホームルーム編成が基本に据えられるべきである。学級は小さな市民社会であり、民主政治の実験室であるからである。

一定の規模をもつ学校では、生徒・教員組織の小集団化（ハウス制）、学級担任持ち上がり制、複数学級担任制などが考えられる。

普通科における職業観の育成および職業教育の積極的位置付け

すべての高校生が、様々な職業や職業社会についてリアリティをもった学習と経験を積み上げていくことによって、職業観を深め、主体的な進路選択を行うことができる。

また、高等学校卒業後、就職したり専門学校などに進学する生徒に対して充実した職業教育が求められている。したがって、普通科においても職業教育を積極的に位置付けるべきである。

柔構造かつ複雑な総合選択制を管理運営する自律的学校経営の創造

総合選択制は、生徒の学系や科目選択等の変化に柔軟に対応しようとするため複雑な仕組みとならざるをえない。このため、状況に柔軟に対応できる自律的な学校経営が必要不可欠である。

（２）神戸らしい国際高等学校の創造

国際化社会の進展および国際都市神戸の歴史と役割を踏まえて、神戸にふさわしい国際高等学校を創造すべきである。この高等学校は、海外帰国子女や外国人留学生、さらには在神戸外国人の子女と日本人生徒が共に生活し学習できる環境を整備し、異文化との交流を通して世界に目を開き、国際コミュニケーション能力、国際理解能力を高めるとともに、日本語・日本文化に対する理解を深めることを目指し、次の各項にかかげる学習を重視する。

なお、この国際高等学校は、国際交流と国際理解教育のセンターとして、他の市立高等学校と連携し、市民に開放すべきである。

国際人の育成

文化的背景の異なる人々と交流し協力できる国際感覚を身につけた国際人を育成する。とくに、自己表現能力、人権・平和への感受性と責任能力の育成を重視する。

国際コミュニケーション言語としての英語教育の充実

受験英語を脱却して、会話、スピーチ、ディベートができる総合的な英語教育を行う。

アジア諸国の言語・文化の学習

近隣諸国、とくに歴史的に日本と関係の深い中国および韓国・朝鮮などの言語・文化を学習できるようにする。

日本語・日本文化の学習

日本語・日本文化を他の言語・文化と比較しながら、その共通性と独自性を学習し、日本に対する理解を深めるとともに、外国人に理解してもらうための知識・方法を学習する。

外部講師や市民ボランティアの活用

多様な言語・文化の教育に求められる人材は、専任教員の他、外部講師や市民ボランティアを積極的に活用する。

(3) 都市型専門教育を実現する高等学校の創造

市立の商業高等学校および工業高等学校は、これまで地元産業界に有為な人材を輩出してきたが、職業科高等学校を取り巻く環境が急激に変化するなかで、その目的と役割を問い直す時期にきている。職業科高等学校は、社会の高学歴化のなかで強い普通科志向と職業科への敬遠傾向、目的意識や学習意欲が乏しい生徒の増加、産業構造や労働市場の急激な変化に対する職業教育の乗り遅れ、高等学校卒業後、専門学校や大学等への進学者の増加などに対して、様々な対応策を講じてきた。例えば、実験・実習を通しての学習意欲の向上、各種資格・検定試験のための学習を通しての目的意識の向上や成就感の達成、きめ細かい生徒指導による学校への適応、進学希望者のための進学類型の設置、学力遅滞者のための補充指導などがあげられる。しかし、これは個別問題ごとに従来の枠組みを手直しする方法の積み重ねになりがちであった。

生徒の能力・適性、興味・関心、進路希望の多様性に応えて、積極的に生徒の個性を伸ばし、職業能力を高めるためには、職業科高等学校の大幅な改革が必要である。その基本

の方法は、これまでの完成教育としての産業人の育成という役割だけでなく、さらに職業教育を継続する生涯学習能力をもった産業人の育成という二重の役割を担う教育システムへの再編である。このためには、次の観点を踏まえた都市型専門教育を担う職業科高等学校を創造しなければならない。

ア．生徒の学習意欲を掘り起こし、自己信頼感を高めるための教育指導の創意工夫

イ．情報化、国際化、サービス経済化、高齢化へ対応した教育内容の再編

ウ．基礎・基本の修得と選択制の拡充

エ．進路分化の柔軟化と進路指導の充実

オ．職業科における普通科目の増加

こうした観点からすると、現行の小学科独立併存型よりも、大括りの小学科相互乗り入れ型ないし総合選択型がより望ましいと考えられる。

ただし、職業教育における専門教育重視と基礎教育重視、ないし専門分化と総合化という相反する二つの方向をいかに制度化していくかについては、次のような選択肢が考えられる。

商業高等学校の改革

ア．情報化、サービス経済化、国際化に積極的に対応した小学科・コースの設置

具体的には、国際経済、流通経済、情報処理などが考えられる。

イ．3校の商業高等学校の再編

1校の商業高等学校を新設するとともに、総合学科や普通科総合選択制高等学校においても商業学系として設置する。

工業高等学校の改革

ア．2校の工業高等学校の変則的な学科併存の是正

現在の機械科系工業高等学校と電気科系工業高等学校の併存は変則的であり、時代に対応した基幹学科からなる新たな工業高等学校に統合すべきである。

イ．大括りの小学科相互乗り入れ型の構成

コース制にして、進路分化を柔軟にする。

職業学科総合型高等学校の創造

商業系・工業系・家政系の職業学科を総合した新しいタイプの総合技術高等学校の意義を検討する。神戸らしい小学科・コースとしては、デザイン、ファッション、生活造形などが考えられる。

総合学科高等学校の創造

大幅な選択制を導入し、専門教育と普通教育の総合化を目指す新しい総合学科を導入した高等学校の意義を検討する。

(4) 多様な教育機会を提供する「インテリジェント・スクール」の創造

夜間定時制高等学校は、昼間働く青少年に対して平等な教育機会を提供するという重要な役割を担ってきた。今日、その伝統的な役割は小さくなる一方で、学力不振、不登校、高校中退経験など、様々な事情を抱えた生徒に学習の場を提供するという全日制高等学校の補完的役割が拡大してきている。このなかで、定時制高等学校は学習意欲を高め、基本的な生活習慣を身につけさせ、社会規範を順守させるなど生徒指導・教科指導上の課題に粘り強く対応しようとしているが、事態を打開する方向を見出すまでには至っていない。また、生涯学習社会に対応して、社会人のためのリカレント教育や資格取得等の教育機会を提供するという新たな役割が求められてきている。

こうした多様な学習者に関われ、そのニーズや特性に応えていくためには、交通至便な場所に独立校舎をもち、基礎的な学力保障とともに豊富な学習メニューと学習形態の弾力化などこれまでの高校教育の枠組みを打ち破る柔軟な教育システムをもった「インテリジェント・スクール」を構想し具体化することが必要である。その際、次の観点が重視されねばならない。

ア．生徒の学習意欲を掘り起こし、自己信頼感を高める教育内容・方法、教授・学習組織の創造

イ．基礎・基本の確実な修得のための学資内容の段階化、学習の個別化

ウ．生徒の多様なニーズに応える選択制の拡充

エ．生徒の学習機会を多様化し、単位修得を容易にするための単位制の導入

オ．昼間と夜間に授業を開講する2ないし3部制、学期ごとに単位を認定する2学期制、修業年限の短縮化（3年以上）などの履修形態の弾力化

カ．市内8校の再編

現在、市内には市立4校、県立4校と計8校あるが、生徒減少期を迎えて両者の役割分担について、県と調整する必要がある。

3 教育環境の改善

新たな市立高等学校の教育環境は、目標とする教育や市民と共に学ぶ高等学校を実現するために高機能で多機能なものとし、教育効果を高め生徒や市民に魅力あるものでなくてはならない。また、将来の高校教育の進展や時代の変化に対応できる柔構造な教育環境が求められる。

そのためには、(1) 多様な学習形態や高度な教育機器に対応できる最適の環境を整えるとともに、(2) 生徒の学習や生活の場として豊かでゆとりある空間や、生徒に心の安らぎを生み、文化的環境として魅力ある空間が構成されること、および(3) 生涯学習施設として、生徒と市民が共同で利用し、市民文化の創造や生涯学習の場として整備されることが必要である。

このような視点に立って、次のような教育環境の整備・改善を提言する。

(1) 多様な学習形態や高度な教育機器に対応できる環境づくり

総合化・選択制に必要な環境

- ・多様な学習講座が開講できる普通教室、特別教室、実習室、実験室
- ・教育効果を高めるための余裕ある教職員配置

生徒の自己教育力を育成する環境

- ・自己学習や共同学習を援助する自習室、教育機器
- ・文字情報や視聴覚情報を充実した図書館
- ・マルチメディア時代に対応した校内設備
- ・市立高等学校間の情報コミュニケーション・ネットワーク
- ・スポーツ種目に対応した専用施設、競技場

市民にサポートされる環境

- ・実験、実習、課題研究、体験学習を支援する校外施設
- 一例として、青少年科学館、博物館、しあわせの村、企業、研究所など

(2) 生徒の学習や生活の場として豊かでゆとりある空間づくり

生活集団を援助する環境

- ・学習集団と生活集団を分離する施設

- ・生活集団の憩いの場となる校内緑化、ラウンジ、カフェテリア
- 生徒の学習や進路などの悩みに適切な助言を与える環境
- ・カウンセリングルームの設置とカウンセラーの配置
 - ・さまざまな進路情報の提供と、進路相談に利用できる進路指導室
- スポーツ活動、文化活動を振興させる環境
- ・スポーツ活動を振興させる屋内外の各種体育施設
 - ・文化活動を振興させる各種文化施設
- 市立高等学校の一体感を高める環境
- ・学習合宿やスポーツ合宿に共同利用できるセミナーハウス
 - ・国際人の育成を目指した海外提携校の推進、海外セミナーハウス

(3) 市民文化の創造や生涯学習の場としての環境づくり

生徒と社会人が共に学ぶ高等学校

- ・市民の高等学校として当初から計画された施設構造

市民文化を創造する高等学校

- ・市民に開放する図書館、音楽ホール、音楽練習室、美術制作室、調理室、情報処理室、運動場、体育館など

市民に支援される市立高等学校の実現の一環として、「市立高等学校教育振興基金」を設立し、一つの学校ではできない市立高等学校の教育活動の支援、海外や共同セミナーハウスの管理運営、留学生の受け入れなどに活用する。そのために青少年交流センターを設置し、その業務に当たるとともに、各市立高等学校卒業者の活動情報やボランティア情報の提供などの機能を持たせる。

4 転科・転学、学校間連携

(1) 転科・転学

市立高等学校生徒の多様な能力・適性、興味・関心、進路希望などに適切に対処するための一つの方法として、転科・転学の制度を整備することが大切である。生徒が市立高等学校に入学した後で、例えば、自分の進路希望を明確にするのにともない他の学科や学校

へ変わりたいと考えたり、あるいは、いったん学校へ入学したもののその学校になじめないことを思い悩み、別の学校へ行きたいと思うようになったりする場合がある。このような生徒のためには、転科・転学制度の整備はとくに積極的な意義がある。

転科・転学においては、何よりも生徒が自覚的に進路選択を行うことが必須要件であるが、学校側は生徒が判断するための転科・転学基準を明確にし、あるいは、生徒の自覚的な選択を可能にするような周到的なガイダンスを行うことが必要である。また、単位認定・卒業認定の弾力化を図るなど、転科・転学を行うためのさまざまな技術的な検討を行うことも必要である。

(2) 学校間連携

市立高等学校生徒の多様な能力・適性、興味・関心、進路希望などに適切に対処するためには、各学校において多様な選択科目を開設することに加えて、学校間の連携を強化することも必要である。

市立高等学校の場合は、その全体的な規模からして、各学校ごとに個別に多様な選択教科を開設することは、教員組織、施設・設備等の点で限界がある。したがって、このような限界を克服するためには、学校間の連携のもとに、他校での教科・科目等の履修を制度的に位置付け、これを積極的に進めていくことが必要である。課題研究や部活動の連携についても同様である。

この学校間連携制度は、生徒の多様な実態に対応し、生徒の履修の機会を拡大し、選択学習の機会を多くすることだけでなく、市立高等学校の教職員・生徒間の相互理解や連帯感を深め、また、他校との接触・交流により自校の特徴に対する認識を新たにし、あるいは、開かれた学校づくりや特色ある教育課程の編成を促進するなどの効果も期待される。

学校間の連携は、平常の学習時間帯における授業のほか、長期休業期間中の集中講義の形態も考えられ、また、普通科と職業科との学科間の連携のほか、全日制と定時制との課程間のそれもある。市立高等学校改善のためにはどのような連携が望ましいかを早急に検討し、特色ある改善事業として工夫をこらし、積極的に具体化されることが望ましい。

入学者選抜制度、学区制

1 入学者選抜制度

市立高等学校の入学者選抜制度については、中学校における進路指導の充実や高校教育改革の進行を基礎にして、現行制度の課題を解決するとともに、市立高等学校の改革の主旨を実現するのにふさわしい、一貫性をもった長期的なあるべき制度を構想する必要がある。

入学者選抜制度の改革は、まず何よりも断片的な知識の量の機械的な判断に偏り過ぎた選抜制度を是正し、過度の受験競争を緩和することに重点が置かれなければならない。そのためには、自ら学ぶ意欲と思考力、判断力、表現力が適切に評価されるような方策を工夫していくとともに、生徒の個性や優れた点に着目しながら評価を行い、選抜方法の多様化と選抜尺度の多元化を図ることが必要である。

このような観点に立ち、当面は兵庫県公立高等学校入学者選抜要綱に従って入学者を選抜するにしても、多様な選抜方法を実施するためには、各学校・学科等ごと、または定員の一部ごとに、学力検査の実施教科の種類や教科ごとの配点を変えたり、調査書と学力検査の比重の置き方を変えたり、あるいは調査書の中の重視する部分を変えたりすることが必要である。

また、受験機会の複数化による多段階の入学者選抜の実施にあたっては、受験競争の激化を防ぐ方法についての検討が必要である。多段階の入学者選抜の一種として推薦入学を活用し、専門学科のみならず特色ある普通科に対しても適用すること、および、専門学科での推薦入学の割合には幅をもたせ、各学校において裁量できるようにすることが必要である。

将来、中学校の進路指導の充実や市立高等学校の改善が進み、生徒が真に興味、関心、または意欲に応じた学校選択を行うことが可能になった際には、独自の神戸市立高等学校入学者選抜要綱の制定が当然必要になる。試験日程や調査書の形式等については、兵庫県教育委員会と調整する必要があるが、神戸市立高等学校の入学者選抜のあり方は、あくまで前述のような考え方と方法で行われるものでなければならない。

2 通学区域

新しい神戸市立高等学校制度の創設にあたっては、その主旨を実現するにふさわしい通学区域の考え方がなければならない。

現在行われている通学区制は、過度の受験競争を緩和するために当面必要ではあるが、本懇話会が提起する特色ある普通科、専門学科、または特色あるシステムをもつ市立高等学校に関しては、生徒の多様な特性に応じた学校選択の自由を制限しないために、神戸市全体を一学区とすることが必要である。

現在の通学区域は、将来、公立高等学校の教育改革の進展状況や全市の人口動態、交通機関の状態等を考えて、区域の再編成を検討することが必要である。

現行法制のもとでは、神戸市を含む兵庫県全体の通学区域の設定は、兵庫県教育委員会の専権事項とされているのであるから、神戸市教育委員会においては、本懇話会報告書の描く神戸市立高等学校の改善計画をよりよく成就させるため、兵庫県教育委員会に対して通学区域の再編を強く働きかけられるよう切望する。

活力ある教員集団、大学との連携

1 活力ある教員集団への期待

新しい高校像を描く上で、またとりわけ生徒の多様な個性、ニーズに応えていくためには、教員数の確保とともに、多様な特性、資質をもった教師の育成が重要である。

急速に変化する時代にあって、新しい社会の担い手を育てる役割は、自らも社会の動きや、未来に見据えた広い視野をもつことが望まれている。また、教員自らのそうした自己啓発に対する自発的な取り組みを、広く支援し、奨励する制度も十分に整えられるべきであろう。

(1) 研修機会

従来実施されてきた種々の制度や研修内容について、それぞれの評価を十分行い、さらに充実させる必要がある。大学や他の研究機関への内地留学や聴講、また民間事業所の協力を得た教員の異業種体験、逆に実業界を含めたより広い分野からの社会人、大学教員等の外部講師の導入を積極的に図り、教員との交流や相互啓発の機会が日常的に得られることを強く期待したい。

また、市民専門講師の導入は、普通教育、専門教育において効果的であり、教員にも研修の機会となっており、さらに幅広く充実する必要がある。

(2) 人事交流

教員の人事交流は、マンネリ化を防止し、教育目標や生徒の実態に沿った新たな意欲を喚起し、教員の力量を高める効果があり、積極的に行う必要がある。この方法としては、同一校の勤務年数を短くしたり、全日制・定時制課程間の交流を積極的に行うことが求められる。

しかし、市立高等学校の校数が少ないこともあり、市立高等学校間のみならず、私立や県立高等学校との人事交流なども、積極的な検討を期待したい。

(3) 学校総合評価

各高等学校では、よりよい学校教育実現のために、自らによる学校総合評価基準の作成を検討することは望ましい。個々の生徒には学期ごとに学習評価が行われ、それぞれの実績に対し、到達レベルの確認が行われるが、教員また学校側にとっても明確な自己評価は欠かせない。この評価基準は、課外活動を含む教育活動全般、学級経営、教員の協力、また地域との関わりなどにいたるまで、高等学校としての多面的な運営全般を網羅できるいわば、学校総合評価基準ともいえるもので、教員個人の活動と学校の組織的な動きに対する評価の視点を基本とする。

評価基準は、経営上の課題を教員相互で共有し、これを基により良い教育の実現のために学校自身の変革、行政への働きかけなどに利用することができ、その学校の特色や長所を市民や地域社会に知らせることに利用することもできる。

適正な自己評価とそれによる改善の行われない組織や活動はいずれ沈滞し、市民や地域社会の信頼を失うことを自戒しなければならない。

改善の視点の中で、学校運営に関する市民の参加・提言制度の設置を提案したが、この制度の運用にあたっては十分活用できる資料と言えよう。

2 教育効果を高めるための大学との連携

高校生の大学施設を利用しての学習、また大学での聴講制度など、教育効果を高めるために大学との連携について積極的に検討し、またその際の単位認定についても可能性を検討する。こうしたことは、高校生にとって広く大学の施設や機能について実際的にふれる機会ともなり、自らの将来に向けた主体的選択の一助ともなろう。また、大学側としてもこれからは、高校生の立場、視点に立った多様な情報提供を独自の個性と手法で行っていく必要がある。こうした背景を考慮しながら、大学機関との有機的な連携を検討することが望ましい。

おわりに

以上各所において提案した改善のための諸方策は、それぞれの主旨を生かし、改善を必要とする状況に遅れることなく、すみやかに実施のための検討に着手し、一日も早く生徒、保護者、教職員その他教育関係者や、市民、地域社会の期待に応え、それらの改善が実現されることを期待してやまない。

《付属資料1》

神戸市立高等学校について

平成6年4月

学 校 名	課 程	学 科	学級数 (生徒数)	学区	校地 面積	設置年度等	創立年度等
赤塚山高等学校	全日制	普通科	8 (320)	1	28,815	S44 湊川・摩耶の合併	M45 神戸市立高等女学校
葺合高等学校	全日制	普通科	7 (280)	1	27,801	S26	S41 神戸市立中学校
		英語科	1 (40)	1		S61	
神港高等学校	全日制	普通科	4 (160)	2	17,843	S24	M40 私立神港商業学校
		商業科	2 (80)	2・3		S24	
		情報処理科	1 (40)	全		S60	
須磨高等科学校	全日制	普通科	8 (320)	3	17,823	S24	T11 神戸市立 第二高等女学校
神戸西高等学校	全日制	普通科	6 (240)	3	26,384	S38	S23 神戸市立 西神高等学校
神戸商業高等学校	全日制	商業科	7 (280)	1	28,384	S26	T12 神戸市立 第三神港商業学校
兵庫商業高等学校	全日制	商業科	8 (320)	2・3	37,936	S30	S3 私立北神商業学校
御影工業高等学校	全日制	電気科	2 (80)	全	25,094	S38 神戸工業より 分離創立	S13 神戸市立 松野実業学校
		電子科	2 (80)				
		工業化学科	2 (80)				
		土木科	1 (40)				
	定時制	電気科	2 (80)	全	S38		
神戸工業高等学校	全日制	機械科	3 (120)	全	32,969	S23・S55 新設移転 H6 科名変更 S55	S13 神戸市立 松野実業学校
		交通工学科	2 (80)				
		インテリア科	1 (40)				
摩耶兵庫高等学校	定時制	普通科	4 (160)	全	3,614	S45・H4 新設移転	S21 神戸市立第二中学校
楠高等学校	定時制	普通科	4 (160)	全	備考参照	S24	S18 神戸市立 第二女子商業学校
長田工業高等学校	定時制	機械科	4 (160)	全	9,406	S55 大和田・産業の合併	S15 神戸市立松野実業 学校第二本科
		電気科	1 (40)				

備考 楠高等学校は神戸市立湊川中学校と共用
学級数(生徒数)は、平成5年度入学生
校地面積はプール面積を除く

《付属資料2》

政令指定都市における市立高等学校

平成4年5月1日現在

政 令 指 定 都 市	人口数 単 位 万 人	A . 市立高校		B . Aのうち全日制		C . Aのうち全日制	
		学 校 数	100万人 当たりの 学校数	学 校 数	100万人 当たりの 学校数	学 校 数	100万人 当たりの 学校数
神 戸	1 4 9	12	8.1	9	6.0	4	2.7
札 幌	1 6 8	8	4.8	7	4.2	4	2.4
仙 台	9 3	6	6.5	4	4.3	2	2.2
川 崎	1 1 9	5	4.2	4	3.4	5	4.2
横 浜	3 2 6	10	3.1	8	2.5	2	0.6
名 古 屋	2 1 6	15	6.9	13	5.0	2	0.9
京 都	1 4 5	8	5.5	8	5.5	4	2.8
大 阪	2 6 0	21	8.1	20	7.7	5	1.9
広 島	1 0 8	8	7.4	7	6.5	2	1.9
北 九 州	1 0 1	1	1.0	1	1.0	0	0.0
福 岡	1 2 5	4	3.2	4	3.2	1	0.8

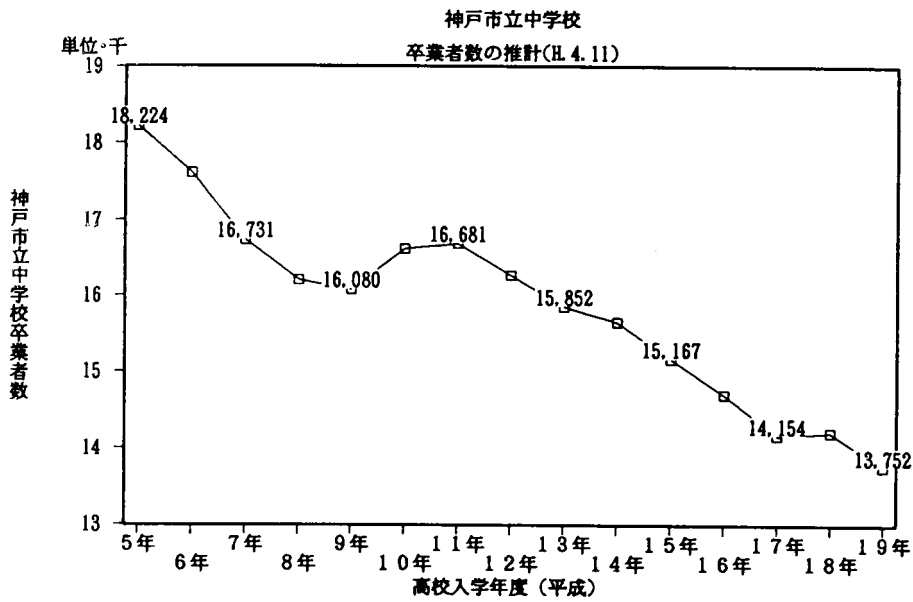
《付属資料3》

神戸市立中学校卒業者の推計

平成4年度の教育調査による推計である。

卒業者数は神戸市立中学校の卒業者数である。

高校入学年度はその年の4月に高等学校に入学するものである。



平成4・5年度 神戸市教育懇話会活動の記録

懇話会	その他の活動	期 日	活 動 内 容
第1回		平成4年 6月25日	テーマ「市立高校の将来を考える」の設定について 「市立高校について」資料の説明・懇談
	講 演 会	7月14日	講演「高校教育像の今日的課題」 講師 大脇康弘（教育懇話会委員）
第2回		7月24日	追加資料の説明・懇談
第3回		9月24日	新しいタイプの岡山県立高等学校見学 岡山城東高校 玉野光南高校
第4回		10月30日	市立高等学校見学 摩耶兵庫高校 須磨高校 神戸工業高校 兵庫商業高校
	懇話会だより配布	1月	「教育懇話会からの報告VOL.1」の市内全校への配布
第5回		平成5年 1月13日	「教育懇話会からの報告VOL.1」について 高等学校見学のまとめ・前回までの討議内容のまとめ
第6回		2月19日	「新しい高校教育の在り方研究」専門部会委員との懇話会 アンケート調査の原案について
	講 演 会	3月2日	講演「企業が求めている人材」-新入社員に何を期待するか- 講師 園井洋一（教育懇話会委員）
	アンケート調査	3月上旬	調査対象「市立高等学校教員」「市立高等学校1年生徒」 「市立中学校2年生徒」「市立中学校2年生徒の保護者」
第7回		3月23日	市立高校改革の視点について
	懇話会だより配布	4月	「教育懇話会からの報告VOL.2」の市内全校への配布
第8回		5月14日	アンケート調査の結果報告について・小委員会の設置について
	第1回小委員会	5月20日	「望ましい高校像」改革討議テーマについて
第9回		6月3日	改革案討議テーマについて
	第2回小委員会	6月17日	中間報告書骨子案の作成
	懇話会だより配布	6月	「教育懇話会からの報告VOL.3」の市内全校への配布
第10回		7月7日	中間報告書骨子案の検討・分科会の設置について
	第1回第一分科会	7月7日	「個性尊重、人間性重視の教育」等について
	第1回第二分科会	7月7日	「21世紀に生きる教育」等について
	第2回第二分科会	7月21日	「21世紀に生きる教育」等について
	第2回第一分科会	7月23日	「個性尊重、人間性重視の教育」等について
第11回		8月5日	各分科会の報告・起草委員会の設置について
	第1回起草委員会	9月1日	中間報告書原案の作成

懇話会	その他の活動	期 日	活 動 内 容
第 12 回		9月9日	中間報告書原案の検討
	第 2 回起草委員会	9月21日	中間報告書の作成
第 13 回		9月28日	中間報告書の提出
	懇話会だより配布	10月	「教育懇話会からの報告 VOL.4」及び「中間報告書」の市内全校への配布
第 14 回		10月29日	中間報告と今後の討議課題・学科制度について
第 15 回		11月17日	学科制度について・分科会設置について
	講 演 会	11月18日	講演「市立高等学校の将来を考える」 - 教育懇話会「中間報告書」を提出して - 講師 平原春好（教育懇話会座長）
	第 1 分 科 会	12月10日	学科制度を考える原理（前提）について
	第 2 分 科 会	12月24日	学科制度について
第 16 回		12月3日 12月4日	埼玉県立伊奈学園総合高等学校見学 埼玉県立新座総合技術高等学校見学
第 17 回		12月24日	各分科会の報告について 「進路選択の自由化、適正化」及び「学区制、選抜方法の改善」の小委員会の設置について
第 18 回		平成6年 1月17日	学科制度・「市立高校の特色を考える」について 最終報告書骨子案作成小委員会の設置について
	第 1 回小委員会	2月3日	「進路選択の自由化、適正化」及び「学区制、選抜方法の改善」について
第 19 回		2月10日	「新しい高校教育の在り方研究」専門部会委員との懇談会
	第 2 回小委員会	2月17日	「進路選択の自由化、適正化」及び「学区制、選抜方法の改善」について
	小 委 員 会	3月2日	最終報告書骨子案の作成
第 20 回		3月4日	最終報告書骨子案の検討・起草委員会の設置について
	第 1 回起草委員会	3月7日	最終報告書原案の作成
	第 2 回起草委員会	3月23日	最終報告書原案の作成
第 21 回		3月29日	最終報告書原案の検討
第 22 回		4月11日	最終報告書の提出
	懇話会だより配布	4月	「教育懇話会からの報告 VOL.5・6」及び「最終報告書」の市内全校への配布

《付属資料5》

平成4・5年度
神戸市教育懇話会委員名簿

氏名	所属・職名	任期年度	備考
平原春好	神戸大学 教授	4・5	座長
新堀通也	武庫川女子大学 教授	4・5	
大脇康弘	大阪教育大学 助教授	4・5	
白石裕	京都大学 助教授	4・5	
池田寛	大阪大学 助教授	4・5	
松本美保子	神戸芸術工科大学 助教授	4・5	
山口徹	神戸YMCA 総主事	4・5	
平野鷹子	弁護士	4・5	
清水勲夫	(財)OAA 事務局次長	4・5	
白杵裕子	(財)兵庫銀行文化振興財団 副部長	4・5	
園井洋一	(株)神鋼ヒューマン・クリエイト社長	4・5	
塚本哲夫	六甲バター(株) 社長	4・5	
黒島健司	神戸市立高等学校PTA連合会 会長	4・5	
名田章仁	神戸市PTA安全教育振興会 専務理事	4・5	
土井徹志	神戸市立鷹匠中学校長	5	
大里健	(前)神戸市立西神中学校長	4	
福尾康之	神戸市立神港高等学校長	5	
谷岡章年	(前)神戸市立兵庫商業高等学校長	4	
田淵賀威	神戸市立長田工業高等学校教諭	4・5	
梅本哲	神戸市立長坂中学校教諭	5	
加登昇	(前)神戸市立西落合中学校教諭	4	
橋本誠司	神戸市立須磨高等学校教諭	4・5	
藤原三喜男	神戸市立兵庫商業高等学校教諭	4・5	
森岡邦雄	神戸市立神戸工業高等学校教諭	4・5	
入江一郎	神戸市立摩耶兵庫高等学校教諭	4・5	
小野雄示	神戸市教育長	5	
福尾重信	(前)神戸市教育長	4	
佐藤郁男	神戸市教育委員会参与	4・5	
有田二郎	神戸市教育委員会参与	4・5	
長尾守	神戸市教育委員会参事	4・5	
坂本繁	神戸市教育委員会指導部長	4・5	
丸岡修	(前)神戸市教育委員会指導部長	4	
松田康宏	神戸市教育委員会社会教育部長	4・5	

神戸市立高等学校の将来を考える

平成 6 年 4 月 発行

神戸市教育懇話会

事 務 局

(〒650)神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号

神戸市教育委員会事務局指導部指導第 1 課内

TEL.(078)322 - 5782